

「益子教会礼拝堂復旧工事了」

代務者 平山正道（四條町教会牧師）

11月17日（木）午後、喜びと感謝のうちに益子教会礼拝堂復旧工事（総工費437万円）完了に伴う引き渡しが行われました。遠路駆けつけてくださった秋山 徹議長と西上信義牧師、わたしが立ち会い、秋山星子姉と西上立子姉も同席くださいました。監査の(株)松下設計の松下充孝兄から工事全般の説明を受けたあと、工事箇所を確認しました。そして、施工した松坂屋建材株式会社の担当者にそれぞれの立場から感謝の言葉を述べ、秋山議長の祈禱によって1時間ほどで無事引き渡しが終わりました。

この復旧工事は4か月前、まだ夏の暑い盛りだった7月21日に始まりました。仮設工事のあと、被害の最も大きかった礼拝堂玄関の真上にある塔の改修に取り掛かりました。『被災支援ニュース』（No.20、9月25日発行）に報告しましたように、益子教会は玄関のポーチ部分が、そのまま上に伸びて筒状の塔になっており、最上部に十字架が立っていました。外壁はレンガ風タイル、内壁は漆喰です。震災によりこの塔の内外に亀裂が多数入り、内側はいつ剥がれ落ちてくるか分からないほどの大きなひび割れが発生しました。当初はこれを改修して元通りにする計画でしたが、工事の過程で傷んだ部分の壁をはがしたところ、長年の雨水浸入もあって、内部の構造材（木）の腐食が相当進行していて倒壊の危険があることが判明しました。こうして、塔の撤去を余儀なくさせられました。

益子教会は近年教勢が落ちて、現在は単独で担任教師の招聘もできない小さな群れです。礼拝堂のシンボルである十字架の塔を失い、ますますじり貧になるのではないかと不安が募りました。しかし、それも杞憂でした。塔は再建できませんでしたが、松下兄の発案によって、塔のあった壁は写真のように、黒い御影石とスレートの天然石タイルをあしらったセンスの良い外観に変更され、屋根のてっぺんには再びあの十字架を掲げることができました。それに合わせて、玄関には新しく庇も設置され、開放的で明るく、雨の日にも使い勝手の良い玄関になりました。

東日本大震災で被災した諸教会・伝道所のうち、復旧工事が完了したのは、益子教会を含めて、まだ数えるほどしかないと思われます。教区「東日本大震災」被災支援委員会や教団が迅速な支援体制をとってくださり、多くの関係者のお祈りに支えられてここに至ることができました。感謝にたえません。今後の益子教会のささやかな宣教の働きを通して神さまと隣人に仕え、これに報いていきたいと思っています。ありがとうございました。



☆ 益子教会 復興感謝礼拝 ☆

*日時：12月11日（日）16時～

*場所：益子教会（栃木県芳賀郡益子町1732-2、電話0285-72-2640）

*礼拝式後、ささやかな茶話会を行います。ご参集の上、感謝と喜びを共にしていただければ幸いです。駐車場に限りがあります。できるだけ乗り合わせてお越しください。

「多くのものをいただいて」

栃尾教会 手束 信吾

去る10月24日(月)から27日(木)まで、宮古教会を拠点にしているYMCA宮古ボランティアセンターの活動に参加してきました。片道約600キロの道のりを新潟地区の教師たちと交代で運転しながら行きました。移動で1日を費やしますので、ボランティア活動をしたのは実質二日間だけとなりました。たった二日の活動をするために、なぜそんなにも遠い距離に行くのか?と思われる方もおられるかもしれません。

私たちが出発する前日の10月23日(日)は、2004年に起こった中越地震の日と重なっていました。あの中越地震発生以後、鉄道の通っていない、交通の便の悪い栃尾まで多くの方が安否を問うため、何を必要としているかを訊ねるため、また、何が出来るわけでもないけれど、とにかくそこに行って苦しみを分かち合いたいという思いで来てくださったことを思い出していました。私も何が出来るわけでもないけれど、とにかく宮古教会を訪ねさせていただきました。忙しくされている森分牧師とは初日の夜に交わりの機会が与えられました。「いま教会が建っているこの辺りは、80年のうち3回水に浸かっている。つまり、人の一生のうち3回水に浸かる場所ということになる。果たして、その同じ場所に教会を再建すべきだろうか。方向性を出すには時間がかかるので、支援してくれる人たちは待っていて欲しい。」という意味のことを言われたことが心に残っています。私たちは、被災された教会が再建の方向性を出されるのを寄り添いながら待ちつつ、しかし、

募金は急ぎつつ捧げることが大切だと思われました。さて、活動についてですが、朝は交通指導から始まります。いまだ信号機が壊れたままの所に立ち、通学や通勤をする人たちのために、黄色い旗を持って車を止めて、横断のお手伝いをしながら、「おはようございます。いってらっしゃい。」と声をかけます。ずっと宮古に駐在しているYMCAのスタッフの人たちは、子供たちともすっかり馴染みになっており、名前を呼んで、調子はどう?などと声をかけておられる姿に感心させられました。他にもYMCAのフタッフの方々は



学校や地域の商店街、仮設住宅の自治組織、行政などともネットワークを作っておられました。スタッフの一人は4月からずっと宮古におられるということで、やはり、ボランティアコーディネーターをするためには、その土地に長く留まることがなくては難しいのだなあと感じました。午前と午後はそれぞれ約2時間ずつの作業をするのですが、二日間ともある方の津波で水や泥をかぶった本を乾かしたり、汚れをふき取ったりする作業をさせていただきました。その方は和泉雅子さんに請われて、北極点を目指す旅に同行された方で、その経験からいろんなお話をして私たちを楽しませてくださいました。特に北極探検の経験から「人は食料がなくても一週間は生きられる。油がなくても3日間は生きられる。しかし、希望がなくては一日も生きられない」と話された言葉に、自らの説教を省みる機会となりました。その他に3か所の仮設住宅を回らせていただく機会も与えられ、そのうちの一か所では中にまで入らせていただき、しばらく住人の方との交わりも与えられました。

今回のボランティアでは、がっつりと作業をさせてもらったというよりも、YMCAの方々からボランティアの姿勢を学ばせていただいたり、被災地の方々との触れ合いを通して、私たちの方がかえって多くのものをいただいた感じがしています。被災地のニーズは時間の経過と共に変化していますが、これからも、まだまだボランティアを必要としていると聞きました。あらためて息の長い支援の必要性を感じながら帰路につきました。